

➤ バックアップ環境の不統一による課題を解消 Microsoft Azure と連携した 「arcserve Backup」がデータ保護の標準環境を構築



ユーザプロフィール

業 種：情報・通信業

会社名：ソフトバンク・テクノロジー株式会社



課題

ソフトバンク・テクノロジー株式会社では、急激に増える社員数に応じて社内情報システムの拡張を急ぎ進めてきた。キャパシティ確保を最優先事項として、システムの新設、拡張が繰り返される中で、そのデータ保護環境の部分最適化が進んでしまった。そのため各システムのデータ保護環境が多様化し、運用業務の属人化を招いていた。

経緯

2012年6月、代表取締役社長CEOに阿多親市氏が就任。阿多社長は就任後すぐに「大きな成長を遂げて、日本有数のICTサービス事業者になる」という方針を示し、高度技術資格の取得、社員の積極採用など成長戦略を進めてきた。社内情報システム基盤の維持・強化は重要な経営課題であり、具体策のひとつとしてデータ保護体制の社内標準化が推進されることになった。

導入

社内情報システム部門はMicrosoft Azure導入を前提に「わかりやすいGUI」「リアルタイムでもバックアップ可能であること」「仮想システムへの対応」「製品ベンダーのサポート力」「コストパフォーマンスとライセンス体系のシンプルさ」という5つの重点要件を掲げ、複数の製品を比較検討した結果、「arcserve Backup」を採用した。

効果

「arcserve Backup」の導入により、目的であったデータ保護体制の社内標準化が実現し、社内情報システム部門の誰もがバックアップ/リカバリ業務を行えるようになった。また、データ保護、リカバリ作業そのもののスピードも向上し、社員増加でデータボリュームが急激に増加している中でも、運用負荷を大きく抑制している。



課題

システムごとにバラバラだったバックアップ / リカバリ体制

ソフトバンク・テクノロジー株式会社は、ソフトバンクグループにおける ICT サービス事業を担う会社として 1990 年に設立された。これまで同社では、社内業務システムの開発と運用については、それぞれのシステム担当技術者ごとに行ってきた。そのため、データ保護についても、担当技術者が設計と運用を決定していたのだが、その結果、大きく 2 種類のパターンに分かれた。1 つはデータ保護製品を用いた方法で、これは経理システムなど比較的重要度の高いシステムに適用された。もう 1 つは、市販ツールを用いるほど重要度は高くないと判断されたシステムで、BAT ファイルやスクリプトを用いた自作ツールによるコピーバックアップが行われていた。

これらにより、データの冗長性は保たれたが、システムごとに手法が異なるため、何か障害が発生した際の復旧対応は、システム担当者に強く依存していた。そのため、システムのデータ保護環境の仕様統一が図られず、運用業務の属人化を招いていた。ソフトバンク・テクノロジー株式会社 管理統括 管理本部 情報システム・セキュリティ部 中野真良氏は、当時の状況を次のように語る。



管理統括
管理本部
情報システム・セキュリティ部
中野 真良氏

「ビジネススピードが要求される中、“今、システム担当者がいないので対応が遅れます” というのは情報システム部門の勝手な都合。このような形で、ビジネスのスピードを鈍化させるリスクを抱え続けるわけにはいきませんでした。」

情報システム部門内でデータ保護のあり方を標準化、一本化して、いつでも誰でもが迅速にデータをバックアップ / リカバリできる体制を確立する。その重要性は強く認識されていた。

経緯

自社の成長を支える基盤として捉え、社内情報システムへの積極投資を継続

情報システム部門が立ち上がる直接の動機となったのは、2012 年 6 月に代表取締役社長 CEO に阿多親氏が就任し、成長戦略に舵を切ったことによる。同氏は「ソフトバンク・テクノロジーを大きく成長させる」ことをスローガンに掲げ、成長戦略を力強く進めてきた。事業成長の実現のため、まず行ったのは社員の積極採用だ。そのため、増え続ける社員を受け入れる社内情報システムは常に拡張され続けた。また、そこから生まれるデータ量も日々拡大していた。企業活動を支える社内情報システムには、クオリティにおいてもボリュームにおいても、高い次元のデータ保護の仕組みが求められたのである。

もうひとつの事情としては、最先端の情報技術の社内導入を積極的に行ってきたことがある。同社は自ら最新の情報技術に携わることで、いち早くノウハウを蓄積し、顧客に対して付加価値の高いサービスを提供することに努めている。これまでも、スマートフォン・スマートパッドや VDI (仮想デスクトップインフラ) の全社導入など、率先して新しい情報技術を自ら取込み、新しいワークスタイルを提案してきた。そうしたことから、これをひとつの契機として顧客にも紹介できる最新のデータ保護体制を確立しようということになった。

導入

わかりやすさとサポート力で「arcserve Backup」を採用

データ保護手法の設計がスタートしたのは、2013 年後半のことである。冗長性や運用のリアリティを考慮した結果、



技術統括
プラットフォーム&データソ
リューション本部
ITインフラ第1技術部
Oracleグループ
館野 潤氏

オンプレミスの物理ストレージに1次バックアップデータを、パブリッククラウドの Microsoft Azure に2次バックアップデータを格納することになった。

それでは、実際にデータのバックアップ・リカバリを担う製品として何を選ぶか。中野氏は、ソフトバンク・テクノロジー株式会社 技術統括 プラットフォーム & データソリューション本部 ITインフラ第1技術部 Oracleグループ 館野潤氏とともに、以下の5点を重点要件として掲げた。

1つめは、「わかりやすい GUI」である。運用担当者の誰もがあまり習得期間をかけることなく、バックアップ/リカバリを実行できるようにするためには、製品の GUI 視認性が重要だった。

2つめは、「リアルタイムでもバックアップ可能であること」である。業務システムの中には24時間365日ノンストップ稼働が必要なものもある。そうした中で、システムを止めないとバックアップが取れないというのでは運用の実態と合わない。

3つめは、「仮想システムへの対応」である。今回は物理システムをバックアップ対象としたが、同社にはすでに仮想化されたシステムが存在し、将来的にはバックアップするストレージ自体を仮想化する可能性もある。バックアップ保護体制標準化という目的からも、システムの物理、仮想を問わず同じ製品で統一したかった。

4つめは、「製品ベンダーのサポート力」である。今回、パブリッククラウドも取り入れ、新しいバックアップ/リカバリスタイルを確立しようとしていた。うまく運用を軌道に乗せるためには、ベンダーの持っている知見やサポート体制も頼りにしたかった。

5つめは、「コストパフォーマンスとライセンス体系のシンプルさ」である。製品を選定したものの、実際にAの機能を実現するにはオプションAが必要で、Bの機能を実現するにはオプションBが必要というのは、ICT製品にはありがちだ。同社は今後モデルケースとして顧客にも勧めやすいよう、できるだけシンプルな構成を実現しようとしていた。

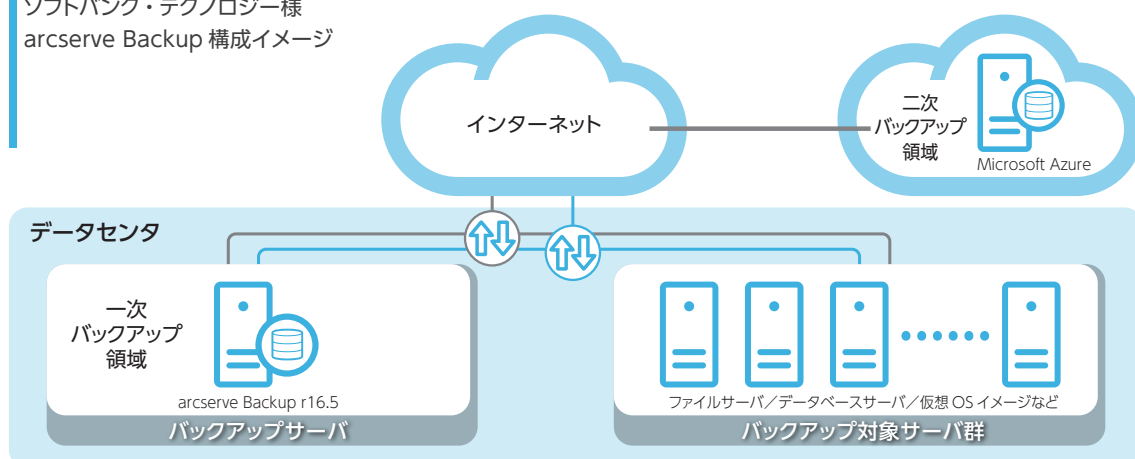
これらの観点から複数のデータ保護製品を比較検討した結果、採用されたのがデータ保護ソリューション「arcserve Backup」であった。中野氏はこう語る。

「GUIが非常にすぐれていました。試用したシステム担当技術者の誰もが『これならすぐに使いこなせる』とうなずくほどわかりやすく、情報システム部門で標準化、一本化するのに適していました。またシステム構成も、管理サーバ側にベース製品、クライアントサーバ側にエージェント製品を導入しさえすれば、行いたいバックアップが実現できるシンプルさも評価しました」

一方、館野氏は中野氏を補足してこう語る。

「以前『arcserve Replication』を導入したときに、特殊な形で適用したのに親身にサポートしてくれたのが印象に残っ

ソフトバンク・テクノロジー様 arcserve Backup 構成イメージ





ていました。今回もパブリッククラウド活用というまだ前例の少ないケースだったにも関わらず、守りに入らず“一緒に考えさせてください”と前向きな姿勢を示してくれました。これならパートナーとして信頼でき、将来ビジネスを共にすることもできると確信しました」

効果

データ保護業務の属人化が解消、そのレベルも向上

2014年、同社情報システム部門は導入プロセスに進んだ。実は、そこで思いがけない課題に直面してしまった。パブリッククラウドへのバックアップでは、レイテンシーを考慮して日本リージョンを選択したのだが、それでもバックアップ速度が当初の想定より下回ったのである。そこで中野氏、舘野氏を中心に Arcserve のテクニカルサポート部隊も対応策を検討。その結果、物理ストレージからのデータ転送をセッション単位としてボリュームを抑えるとともに、ジョブの5重並列実行を実施することで当初想定したとおりの速度を達成した。この問題の解決を含めても動作検証にかかった期間は1ヶ月強ほどで、2014年3月には予定どおり本稼働を開始した。

現在、同社では全10台の物理サーバが arcserve Backup によって一元的にデータ保護されている。基本的には、一週間に一度休日にフルバックアップ、平日は差分バックアップを毎日取る形で、まず1次ストレージへデータが格納される。その後、2次ストレージである Microsoft Azure へデータが送られるが、1次ストレージでも一定期間データを保管。この二次バックアップまでの流れは arcserve Backup で組んだスケジュール設定に従い自動で実行される。有事の際には、ここから優先的にデータ復旧を図ることで、リストア速度・時間を最適化している。

arcserve Backup の導入によって、当初の目的であったデータ保護体制の標準化が実現し、システム担当者の誰もがいつでもどのシステムであってもバックアップ/リカバリ業務を行えるようになった。属人性が解消したため、いざというときの人的スピードが格段に向上した。

社員増加でデータボリュームが急激に増加している中でも、システム担当者の運用負荷も大きく削減している。リカバリについても同様だ。中野氏は次のように語る。

「従来はデータの保存場所や操作手順が多岐にわたり、作業自体も複雑だったのでリカバリには時間がかかっていました。しかし、『arcserve Backup』で非常にシンプルに一歩化され、時間も大きく短縮しました。システムの可用性向上という意味でこのメリットは計り知れません」

今後、同社はデータベースや仮想化環境に関してもデータ保護標準化を本格化させるとともに、高まるパブリッククラウドニーズに応え、今回確立したソリューションを顧客に披露する取り組みも積極的に進めていく予定だ。

arcserve®